

[西ドイツ、東ドイツ、そしてドイツ]

1990年の暮、NHK「紅白歌合戦」出演の中継のため、久しぶりにベルリンを訪れた。大晦日にブランデンブルク門の下を、旧西側から東側に、徒歩で通り抜けた時の感触は何とも言葉にしがたい。近くでは、壁のかけらが至る所で売られていた。

この年、紅白歌合戦のために私に用意された「場」は、旧東ベルリン市内のゲッセマネ教会。ここは、壁の崩壊に至る前、平和と政治改革を求める人々の牙城となっていた場所だ。

ベルリンの壁崩壊1周年を記念した《紅白》で歌ったのは、シューベルト作曲の《菩提樹》。実は旧東ドイツの室内オケと一緒にコンサートの中の1曲で、ペーター・シュライアーというドイツきっての宮廷歌手が指揮してくれた。歴史を刻んだ重要な教会には、ものすごい数の聴衆の熱気が溢れていた。バルコニーに鈴なりになった多くの顔と瞳。思い出すと今でも胸が一杯になる。

音楽大学の学生として、1976年秋からわずか3年ほどしか暮らしていなかった私にとってさえ、西側から東に「歩いて通ることができる」のは、現実からほど遠い感覚だったのだから、ベルリンの市民には、感慨も含め、本当に形容しつくせない思いだったろう。

今はベルリンの壁崩壊後に生まれた人たちも多くなり、「その時壁で何が起こったか」という写真集をネットで探すと、1989年の壁崩壊の時のものばかりが出てくる。

私の探している本は、1961年夏に壁が作られたときの写真集だ。所有していたはずなのに、何回かの引越しでなくなってしまったのか、手元に見つからない。

その中の何枚かのモノクロ写真は今でも胸に焼きついている。

東ドイツの兵士たちが築いている壁の両側に、あまりの突然のことに、ただ茫然と立ち尽くして見つめることしかできない人々。買い物かごを胸に抱えたまま固まっている女性たち。

また、自分の手で“作成中”の、まだ胸までの高さもない壁を、東側の兵士が突然西側へ飛び降りて逃げる瞬間の姿。

今、ふと思う。いったい誰がこれらの写真を撮ったのだろう。スマホや携帯電話など言葉さえ存在しなかった時代。本当に一体誰が…。

壁は“できた”のではない。ある日突然作られたのだ。「いったい誰が、

何のために」という問いに答えられる日本人は、今どのくらいいるだろうか。

私がベルリンに滞在していたころ、当時の知り合いから聞いた“東ドイツの公式見解“は、「西側から東の理想郷に来たくて逃げこむ人たちが入ってこないために、東ドイツが壁を作った」だった。つまり、東側の世界は、それほどすばらしいものだということを自国民にアピールしていたわけだ。

壁の「突然さ」は、家族をもその瞬間に分断した。たまたまその日、その時に、買い物や東側の親戚を訪れていた西側の人は、帰ることができず、東側にそのまま残された。言葉で記しても、ちょっと想像ができないかもしれないが。

第二次世界大戦後、ドイツは「勝者」の間で分けられた。西ドイツと東ドイツになり、それぞれに連合軍側の駐留軍が置かれた。そして民主主義と社会主義の構図がはっきりと示された。

ベルリンという都市は東ドイツの中にある。これも二つに分断され、西ベルリンは東側にある「西側の孤島」となった。(実はこの戦争後、日本も東京も、そうなる可能性がなかったとは言えないらしい。)

ただ、政治的な国境の壁は電波を遮ることはできなかった。西ベルリンで流される TV 番組は、当時、そのまま東ベルリンでも受信できた。西側の様々な商品の CM も、東側で目にすることができた。西ベルリンの友人は、東側にいる親戚を訪れるたびに、毎回本当に多くのものを「お土産」として“ねだられた”そうだ。西側の CM の宣伝内容を本気で信じていたから。時には、着て行ったものまで「身ぐるみはがされる」ような目にもあったと言う。

壁ができてから1989年の11月まで、両ドイツの人々はそんな世界で生きてきた。まさかその壁が壊れる日が訪れるとは、誰が想像しただろうか。私はその時東京にいた。TV で突然その画面を目にしたとき、体に戦慄が走るような感動で微動だに出来なかったことを思い出す。ベルリンの友人たちと「そのとき」を共に体験できなかったことを、本当に残念に思った。

私にとって初めての海外生活の街だった西ベルリン。友人の家の裏手から、鉄条網を見越した川向こうの東側に、生れて初めて見た戦車が走っていた。望遠鏡で見ると、河原には大きなシェパード犬がうろついていた。逃亡者の監視のため、と教えられた。もちろん監視塔も立っていた。

東ベルリンには有名なオペラ劇場があって、西ベルリン側から「チェックポイント・チャーリー」、その他の「国境」を通り、普通は1対4で換金される西マルクと東マルクは、国境で“正式に”1対1で換金する。オペラのチケットや本や楽譜は安いし、簡単な夕食を摂っても最低換金額は余った。東マルクの持ち出しは許されない。往復の度に毎回、カバンの中身や所持金のチェックが行われ、別にワルイことをしていたわけでもなく、ドキドキした。

西ベルリンから西ドイツの他の街に車か列車で行くときは、必ず東ドイツを通り抜けなければならなかったが、やはり国境での検査は厳しかった。列車の中をシェパード犬を連れた警察官が、ゆっくりと通り抜けていく。車や列車の下は、先端に大きな鏡を取り付けた、モップのような器具で探っていた。そこに西への「逃亡者」が張り付いている可能性があったからだ。アクション映画の話ではない。実際に何人もの人たちが見つかри、捕まっている。

東西ドイツが統合された1年くらい後、車でかつての国境を通ったことがある。例の「鏡つきモップ」が、誰もいない検問所の至る所に放置されてそのまま残っていた。まるで廃墟だった。幽霊がさまよっているのでは、と思わせる寂しげな廃墟は、しかし、統一の平和を表すシンボルの一つでもあったわけだけれど。

統一後、最大の問題は経済状況の格差だった。旧東側には、いわゆる「管理職」の人々がいなかったことが、問題の解決を阻んだ要因の一つとも言われた。(それまですべて「国」で統治管理していたせいだ。) そんな中で、最もスムーズに移行した分野はスポーツや芸術。彼らは「国の誇りのシンボル」だったので、それまでも、国境はあつてなかったようなものだった。西側と同じ水準で活躍し、公に“自由に”移動できていた。旧東ドイツの某音楽家の家のバスルームは、すべて九谷焼のタイルでできていた、という事実は、彼がどれほど優遇された生活をしてきたかを示す。ただ、彼らは「顔」でもあつたが、外貨を稼ぐ重要な役目も担っていた。西側でのコンサート出演料の70%は、外貨のまま、自国に納めなければならなかったと、他の東側の友人から聞いた。

ある友人の妻の弟は、西側へ逃げようとして、国境で銃で打たれて死亡した。それでも友人自身は、愛する故郷、ドレスデンに留まり、統一の動きの様子を見守っていた。

世界的なキャリアを持つ歌手だった彼は、国内外に多くの友人がいたが、統一後、大きなショックを味わうことになる。

人々は“普通”の生活ができるようになり、希望すれば、旧東ドイツにおける自分の「書類」が読めるようになった。

以前も“自由”に行動できていた彼のような人たちには、特別にもものすごい量の(STASIの)「監視報告書」があったそうだ。そしてそれを読み始めたとき、それまで「いい友人」として付き合いしていた東側の何人かが、統一後、突然自分の周りから“消えて”しまった理由を理解した。初めの何ページかに、かつての多くの友人の名前を見つけた彼は、それ以上「報告書」を読むことを拒否した。

一つ忘れられないことがある。統一後、結構な年月が経っていた。変わらずドレスデンで暮らしていた彼と、電話で話していた時の事。小さな簡単なコンサートについて、「これは SCHWARZ でいい」(ドイツ語で“クロ”、日本語の意味でブラック、“闇仕事”、つまり申告ナシで OK)と何回繰り返しても、意味を分かってもらえない。

きっと東側のドイツ語では、そういう表現はないのだろうと思っていた。我が家に泊まりに来た彼、「もちろん知ってるしわかっていたさ。でも電話が政府に盗聴されているかもしれないだろう？」と言った。その言葉にびっくりしたが、彼らはそれほど長く、そういう社会に生きていたのだということ、改めて思った。

私のベルリンでの歌の師は、もともとは旧東ドイツの出身だった。まだ東西ドイツのころ、東ドイツの Zwickau という都市で催された国際音楽コンクールに審査員として招かれ、その近くに住む昔の家族を、久しぶりに訪問することが許可された。

甥や姪、その子供たちにも会えることをとても楽しみにしていた。公の「政府招待者」として東ドイツを訪れたので、ある程度行動の自由はあったという。いろいろなおみやげもたくさん持って行ったはずだ。何週間か後、西ドイツに戻ってきた先生は、悲しそうだった。甥の娘、小さな5歳くらいのかわいらしい女の子は、自分の家族にこう尋ねたのだそうだ。「エリーザベトおばあちゃんは西ドイツの人でしょう？ 西の人は悪い人だから付き合いはいけないといつも言われるけれど、どうしたらいいの？」「あのね、エリーザベトおばあちゃんは私たちのおばあちゃんだから、他の人とは違うの。特別。だから大丈夫よ」が親からの返事だったという。「東側の人たちは、子供の頃からこうやって教えられているのね…」

大変ショックだった、もう二度と訪ねたくない、と先生は言った。

統一ドイツになって30年以上が経つ。長く首相を務めたメルケル氏も旧東ドイツの出身だ。

今、ドイツに暮らす人々は、どんな思いで歴史を振り返っているのだろうか。1994年に日本でも出版された、イアン・ブルマ著の「戦争の記憶」という本を改めて手に取った。